

妻木晩田遺跡洞ノ原地区の西側丘陵と環濠について

2015・6・

内田正英

1 はじめに

国の史跡『妻木晩田遺跡』は、東西2Km、南北1,7Km、面積170ヘクタールにも及ぶ。遺跡の西端、洞ノ原地区西側丘陵からは環濠の一部が検出された。この環濠については

『ムラが作られ始めた頃、西側丘陵には環濠が掘られたが、その後丘の上に建物が作られた頃には埋まっており、何のために掘られたのか謎である。

環濠は、妻木晩田の山に沢山の人が住み始めた約2000年くらい前に掘られたもので、丘陵を囲むようにぐるりと円形に巡っており、その直径は約65mである。濠の規模は、幅約4m、深さ約2mもあり、一度中に落ちると簡単には這い上がることができない。

この環濠の内側には、現在、竪穴住居や高床倉庫を復元しているが、これらは環濠が埋まってしまった後に建てられた建物である。』

とされている。

この洞ノ原西側丘陵と環濠についてかんがえてみたい。

2 環濠

妻木晩田遺跡発掘調査報告書（淀江町教育委員会）（以下「調査報告書」という。）には、環濠に関し次のとおり記録されている。

『環濠は、1期（弥生時代中期後葉）に掘削され、8～9期（弥生時代後期後葉）には機能を失い、周辺利用に伴い自然埋没した。

環濠は、集落域を取り囲むものではなく、集落の縁辺の監視、警戒の目的で設置されたと想定したい。

環濠地区の性格を窺わせる遺構として、環濠の内側では、物見など特殊な役割が想定される建物跡（DHSB11）、狼煙場と考えられる焼土遺構、旧表土上面に備えられた礫石（68個）などが確認された。』

3 環濠と集落の関係

環濠と集落とのかかわりについては

『第Ⅰ段階（弥生時代中期後葉）

まず、洞ノ原地区の丘陵先端に環濠が形成される。本格的な集落形成は始まっておらず、また、洞ノ原地区の直下に同時期の晩田遺跡が所在する。

第Ⅱ段階（弥生時代中期末）

洞ノ原地区では引き続き環濠が維持され、墳丘墓の発端として東側丘陵に1,2号

墓が造営される。

第Ⅲ段階（弥生時代後期前葉）

集落の形成が始まったと判断される。洞ノ原地区では継続して環濠は維持されるが、この段階で、洞ノ原墳墓群の築造は終了する。

第Ⅳ段階（弥生時代後期中葉）

環濠は次の8期（弥生時代後期後葉）に埋没するため、この段階で機能を停止するものと考えられる。』（前記調査報告書）と記録されている。

4 西側丘陵について

以上の調査報告書から想定されることは、洞ノ原西側丘陵は、妻木晩田の丘の上に人びとが住み始めるより以前から、麓の周辺に暮らしていた人たちにとっての、古くからの特別な意味を持った場ではなかったか、ということである。したがって、この段階では環濠は勿論まだ掘られてはいない。

それは、妻木晩田の丘に人びとが住み始める弥生中期後半より以前のことで、人びとが水稻農耕をはじめてから程ない頃からのことであつたのではないかと思える。それまでの縄文時代から続いてきた狩猟採集の暮らしに代わって、水稻耕作を取り入れた農耕の生活が定着するとともに、春には種を蒔き秋には収穫するという生産システムが確立する。それとともに今日の農業生産がそうであるように、農耕には常に天候など自然に左右されるという不確定な要素が多い。弥生時代のムラ人たちも、自分たちの意思や努力を超えた自然の力に逆らうことが出来ず、それ故自然を畏怖し、反面自然の力に祈り頼ったことであろう。古く縄文時代の頃から続いてきた自然崇拝＝精霊信仰は、この時代の多くの人たちにもそのまま受け継がれて、ムラ人たちの力を超えた存在への崇拝で、ひたすら農耕の平穏と豊穡を祈ったのであろう。それが山の神への信仰であり、神名備の存在であつたのではあるまいか。

妻木晩田の周辺の人たちにとっての神名備山、それはおそらく孝霊山であつたに違いない。洞ノ原西側丘陵は、こうした山の神を祭るムラ人たちにとっての神聖な祭りの場所ではなかったかと思えるのである。

洞ノ原西側丘陵がムラの祭りの場ではなかったかと思われる理由について考えてみたい。

第1には、洞ノ原地区からは東側丘陵も含めて、孝霊山に隠れて大山は全く見えず、孝霊山はその両袖に2つの峰を脇侍のように従えて、神名備としては最も荘厳にして美しく眺望できる場所であることである。

第2には、西側丘陵には、現在米蔵として高床倉庫が復元されているが、この辺りからプラントオパールと呼ばれる物質が発見されていることである。プラントオパールは、イネ科植物の細胞中に取り込まれたガラス質の物質が、土壌中に残ったものとされている。

これは、西側丘陵で毎年秋に執り行われた豊年感謝の祭りに、その年の収穫物としてイ

ネなどの農作物が繰り返し奉供された結果であると考えられるのではあるまいか。

5 稲吉角田遺跡出土の土器壺について

上記のほかにも、西側丘陵の意味を考える上で見過ごすことの出来ない重要な発見がなされている。それは、妻木晩田遺跡から程ちかい稲吉角田遺跡から出土したとされる大型の土器壺の存在である。

『米子市淀江町の角田遺跡から1980年、胴径58cmという雄大な中期の壺の肩部をめぐる絵巻物風のへら描き絵画が見つかりました。接合関係の間違いないものだけでも、舟、建物2棟、木があり、ほかに接合はできないが、シカと太陽を示す同心円文があります。』（1994年「ふるさとの古代史」山田一仁）

この壺は、土地改良に伴う調査から偶然発見されたものようであるが、現在上淀白鳳の丘展示館に所蔵・展示されている。

この壺に描かれている線刻画について、私は西側丘陵に実際に存在した風景をもとにイメージされ、麓のムラ人によって土器に描かれ焼成されたものではないかとかんがえている。

壺に線刻されている舟は、洞ノ原西側丘陵に建てられていたと思われる物見櫓風の高い建物に向かって漕がれている。おそらくは、淀江潟に向かって漕がれていることをイメージしたものであろう。

『美保関と淀江とは古来深いつながりをもっている。美保関港が日本海沿岸での最重要港であった歴史からして、淀江港というものの存在も、地形、地理からみて今は水田化しているが、古代淀江港は港湾としてすぐれた港であらねばならない。』（1981年「鳥取県淀江町・宇田川地区土地改良に伴う調査概要」佐々木 謙）

このように、西側丘陵には、海を望む物見櫓が立ち、その丘の麓の淀江潟には交易船の出入りする港があったに違いないと思われるのである。

壺の左端の木の枝に大きな果物風の絵が描かれているが、これは銅鐸がぶら下げられているのではないかと私は考えている。

以上述べたように、西側丘陵は稲吉角田遺跡から出土した土器壺に描かれた線刻画から考えても、弥生時代中期頃の古い時代からムラ人たちにとって、特別の意味を持った場所であったと考えられるのである。

6 環濠の築造

ムラ人たちにとって西側丘陵が特別の意味を持った場所であったとして、何故弥生時代中期後葉に環濠が掘られることとなったのであろうか。

調査報告書によれば、環濠の掘削は弥生時代中期後葉、そして墳丘墓1、2号墓の築造は弥生時代中期末とされている。時間的に若干の差はあるものの、両者の造営はほぼ同時期に行われたとされている。

これらの点に関して、誤解を恐れずに言えば、古くから続けられてきた銅鐸を用いた祭りから、新しく人びとの心を占め始めた祖霊崇拜への移り変わりという大きな時代の流れの中で、ムラ人たちの精神風景を二分した変化と相克があったのではあるまいか。

弥生時代に入って、水稻農耕が定着するにつれ、家族を単位とする古くからの狩猟採集の暮らしと異なり、水稻農耕に伴うムラ人たちの協同作業が必然的に必要となってくる。多くのムラ人たちにとって、統制のとれた協同作業を進めるためには、集団を統率する強いリーダーシップが必要となることは明らかである。それは、ムラにおける首長の誕生である。

そして、時代とともに社会の階層化が進み、生前ムラを統率した首長は、亡くなると神になったのである。

おそらくは、この時期、妻木晩田のムラにおいても古くからの銅鐸を用いた祭りから、墳墓築造による祖霊の祭祀へと移り変わる過程にあったのではあるまいか。

こうした過渡期にあって、ムラ人の総意として、二分した価値観の併存を容認し、東側丘陵にムラ長の墳丘墓の築造を受け入れるとともに、他方、旧来からの祭祀の場であった西側丘陵にも環濠を設けることによって、山の神への尊崇も守り続けるということになったのではあるまいか。

やがて、祖霊崇拜が定着するとともに銅鐸の祭りは薄れて行く。それに伴って、ムラ人たちから環濠の意味と存在は次第に忘れられていった。そして、妻木晩田の丘に最も多くの人たちが住む頃、弥生時代後期後葉から終末期にかけて、西側丘陵にも人びとが住み始める頃には、環濠は埋まっていったものと考えられる。

7 むすび

妻木晩田の丘には、弥生時代後期から終末期にかけての約300年間に亘り、人びとが暮らしていた。この時期は、所謂魏志倭人伝において「倭国乱相攻伐曆年」と記された時期と重なっている。

洞ノ原西側丘陵は、それ以前の古くから麓の人たちにとって特別の意味をもった場所として受けとめられていたと考えられる。

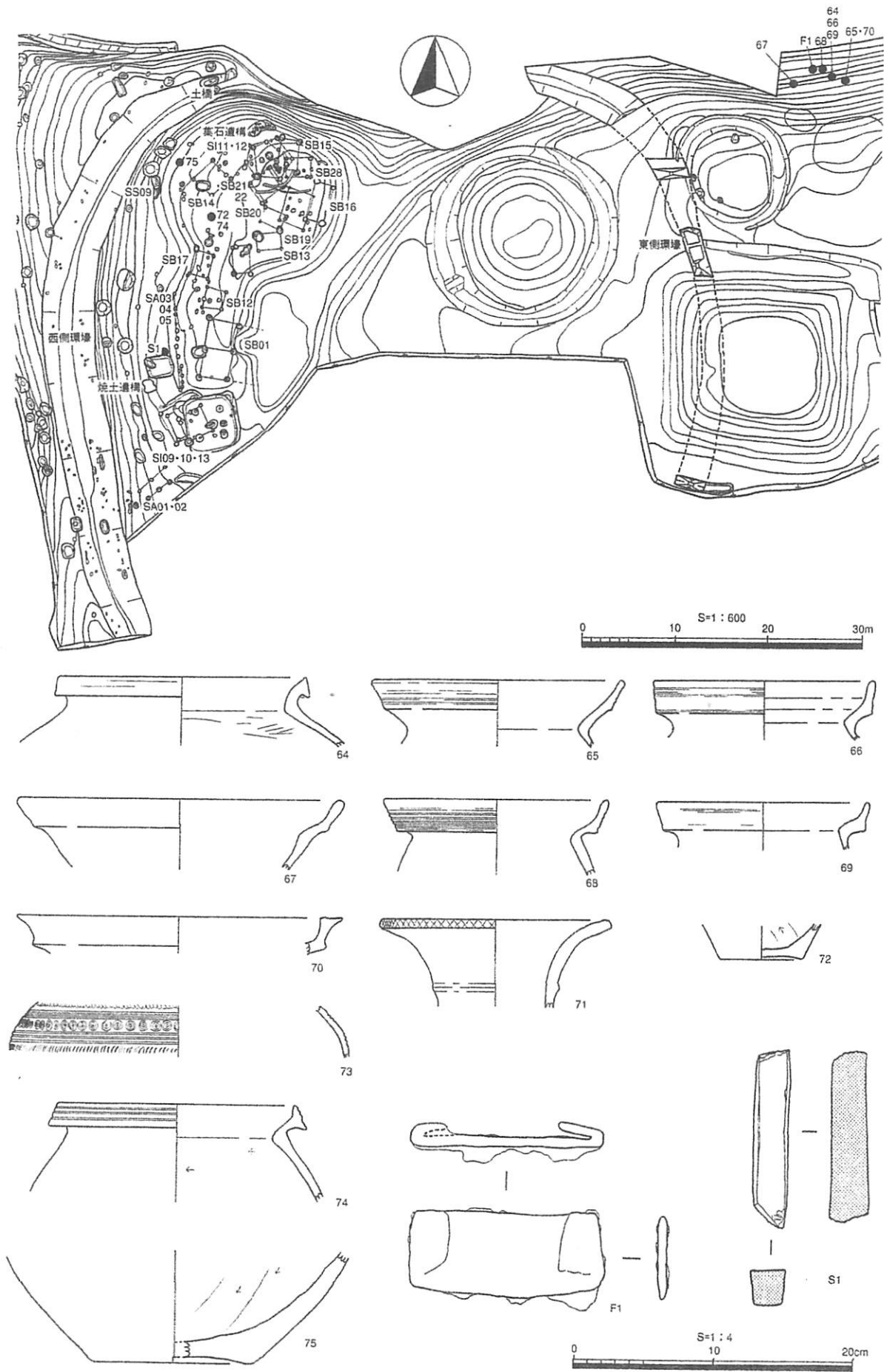
当時、倭と呼ばれていた古代日本は、それまでの小さなムラ単位の社会から、地域におけるムラの統合が進み、次第に部族的社会として大きくまとまっていくという流動的・変革的な時代であったかと思える。やがて、部族間の政治的連合を経て、国家として統一されていくという古代日本の国家形成に向けて、激動の過程にあったと考えられる。

こうした時代の大きな流れの中にあつて、妻木晩田のムラもまたその渦流から遁れることはできず、いろいろな形で影響されていったことであろう。

洞ノ原西側丘陵における環濠を含めた遺構は、古くから人びとを支えてきた素朴な精霊崇拜の跡を残しているものと考えられる。そして、東側丘陵における墳墓の築造は、新しい祖霊崇拜へと移り変わっていったムラ人たちの営みの奇跡ではあるまいか。それは、や

がて墳墓の築造がより政治的な意味を深めていく古墳時代へとつながっていく、新しい時代の精神風景の展開を予想させているようにも思えるのである。

弥生時代後期中葉以降、墳墓の築造が仙谷丘陵に移るに伴い、洞ノ原地区西側丘陵と環濠の意味と存在は、次第に人びとの記憶から遠ざかり忘れられていったのである。

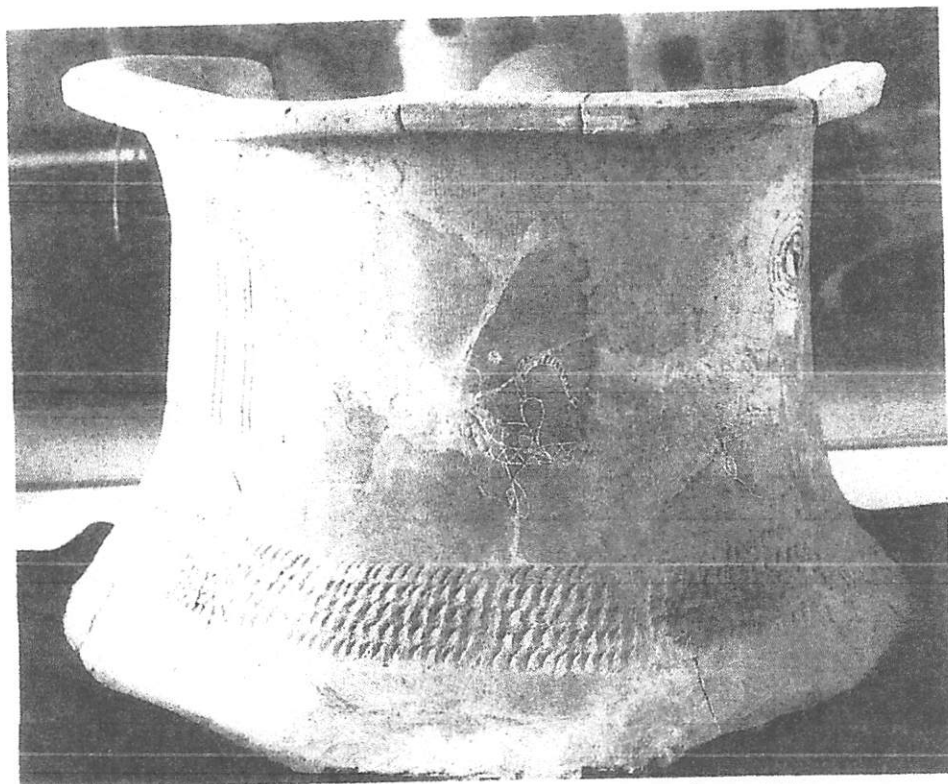


第31図 環壕地区遺構配置図及び出土遺物

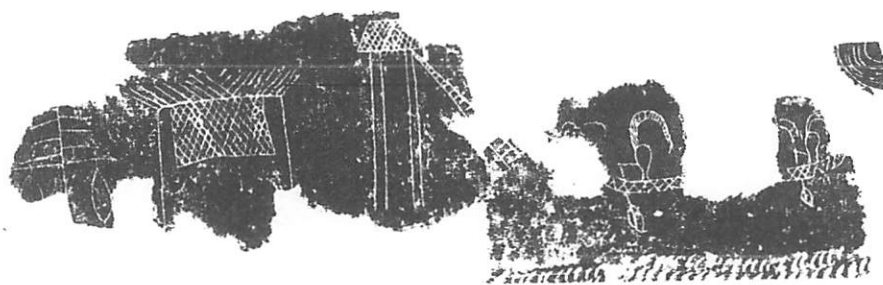
時期	松尾頭・小真石清水		妻木山・洞ノ原			妻木新山・仙谷		松尾城		時期合計	
	居住域	墳墓	居住域	環壕	墳墓	居住域	墳墓	居住域	墳墓		
1	貯蔵穴出現		貯蔵穴出現	形成						0	
2	住居跡初源、凹形	1	貯蔵穴減少		墳丘墓築造					1	
3	凹形 貯蔵穴激増	1	貯蔵穴減少							1	
4	凹形	2				住居出現 不整凹形、隅丸方形	3			5	
5	凹形	4	住居出現、凹形	4		住居増 凹形、楕凹形主	16			24	
6	凹形	5	凹形・隅丸方形	5	周溝内埋葬	住居減少 凹形、不整凹形主	9	墳丘墓出現		19	
7	住居増 凹形主体、隅丸方形出現	10	住居形態多様化	3		凹形、楕凹形主 大型住居 (35.36㎡)	11			24	
8	住居増 大型住居、大型建物 (両庇付大型掘立柱建物) 住居形態多様化 SI45で後淡破鏡 遺構密度最大	17	住居増、形態多様化	17	埋没	凹形、隅丸方形	9		住居出現	1	44
9	住居数最大 大型住居 (41.76㎡他) 住居形態多様化	22	住居数最大 大型住居 (44.96㎡他) 隅丸方形過半数 SI119で銅鏡出土	56		住居増 住居形態多様化 大型住居 (34.56㎡)	14		住居増 隅丸方形主 SI11から銅鏡紐 大型住居 (33.12㎡)	5	97
10	住居減少 隅丸方形 大型住居 (31.00㎡他)	7	住居減少 隅丸方形 大型住居 (33.92㎡他)	16		住居減少 隅丸方形主	5				28
11	住居小型化	7	住居数やや増 住居形態多様化 (隅丸方形、 多角形、隅丸三角形) 大型住居 (38.56㎡)	24		住居減少 大型住居 (38.48㎡)	3		隅丸方形	3	37
12	住居減少 住居小型化 玉造工房 (SI31)	5	住居減少 隅丸方形主 大型住居 (34.88㎡)	9		隅丸方形 大型住居 (34.24㎡)	5		隅丸方形	3	22
13	住居減少 方形	4	住居減少 方形、小型化	3		方形主、小型化 土器焼成土坑 (SK156)	3		方形	1	11
計		85		137			78		13	313	

第5表 妻木晩田遺跡の推移 (松井潔作図を一部改変)

資料3 「ふるさとの古代史」から転載



へら描き絵画のある弥生土器（淀江町角田遺跡）



土器に描かれた絵。左から樹木、切妻住居、高床建物、船、太陽。